談論風発
INTERVIEW

森島 朋三
MORISHIMA Tomomi
立命館
理事長

関西の未来創造に 学生・若者のパワーを

経済も大学も今、大きな転換期に差し掛かっていると感じています。例えば、日本で売上高が30兆円を超えた初めての企業であるトヨタ自動車の豊田社長は、同社の研究開発費が1兆円強であるのに対し、GAFA、例えばGoogleが未来の移動体に関する研究開発に約2.4兆円を投じていることに非常な危機感を抱いておられました。大阪でも大きな工場があった場所が今はAmazonの物流拠点になっているなど、経済構造の変化の波は地域にも押し寄せてきており、産業の変遷を身近に感じています。

日本企業はこれまで底堅い技術力で世界を席巻してきましたが、今後10年、20年でどう変わっていくのか、大きな視点でとらえておく必要があると思います。大学・教育機関も、こうした急激な変化に対応して、転換期を乗り越えていかなければなりません。

立命館は、現在16学部22研究科を擁する立命館大学、立命館アジア太平洋大学（APU）、そして4中学校・高校、1小学校を有しています。今、AI時代における教育とは何かが問われています。われわれの強みは、小中高大、そして大学院まで一貫して連携しているということです。この強みを生かし、ユニークなバックグラウンドや考え方を持っていたり、高い問題意識や能力を持っている、そんな個性を見つけ出し、AI時代の新しい人づくりを行いたいと考えています。受験も否定はしませんが、今必要なのは、受験競争によるものではない「個性をとがらせ、伸ばすこと」。これをやっていかないと日本は持たないのではないでしょうか。

立命館としては、さらなるグローバル化と研究・教育の高度化をめざしています。グローバルの本質は多様性だと考え、留学生の受け入れ、送り出しとも日本有数の規模で行っています。かつてはグローバル化自体が目的でしたが、今はグローバル化を通じて多様な学生の集まる大学にしていきたいと考えています。特にAPUは学生の半数が留学生で、教員も外国人が半数を占め、日本語と英語で同じ授業をすることで注目いただいています。

近年、食マネジメント学部や映像学部、グローバル教養学部など、少人数ながら特色ある学部を新設しています。例えば、グローバル教養学部は世界有数の研究大学であるオーストラリア国立大学（ANU）と立命館大学の2つの学位を得る日本初の共同学士課程です。このような突き抜けた取り組みを重視していこうと思っています。

関西については、大阪・関西万博、IRの誘致などが大きな契機となって変化していくだろうと想定しています。それにあたっては、こうしたプロジェクトに学生や若者の参加を促せるかどうかが成否の鍵のように思います。京都には、私自身が若いころにかかわった「大学コンソーシアム京都」という組織があり、その事業の一つとして「学生祭典」があります。これは全京都の学生の参加によりさまざまなパフォーマンス・模擬店・コンサートなどが行われ、秋の平安神宮前・岡崎プロムナード一帯を10万人以上の観客が埋め尽くす一大イベントです。この事業は、単なるイベントではなく、京都の新たな学生文化として根づきつつあります。

関西はアジアを中心とする観光客で活況を呈しています。それには関西が誇る文化への憧憬が寄与していると思いますが、未来志向の文化創造が新たな時代の都市の魅力となっていかなければならないと思うのです。その意味で、「2025関西新創造学生コンソーシアム」のような組織を作ることができないか、関西新創造のために学生パワーを積極的に生かす機会を創出できないかと考えています。大学がその後見役を買って出るのは当然です。新たな関西の魅力創造の一翼を担っていきたいと思います。（談）